

12. 演習で事前の対策を考える

自然災害が発生したときには、避難することが第一です。そこで問題になるのはどのような方法で情報伝達を徹底するのか、避難の時期と方法、避難場所の確保と環境の維持ということになります。これらを短時間に適正に実施することは、実際には大変難しいわけです。というのも、行政にしても多様で複雑なことが次々に生じてきますし、さまざまな対応を限られた人員でこなすわけで限界があるのは当然です。住民にとっては、不安と不満が累積しますが、これが非常事態なのだということは理解しなければなりません。

そこで、このようなときには、自分であるいは地域でできることは対応することが大事で、そのために訓練を通じて実践力を蓄えておくことが必要となります。そのときに、極めて重要なことは先にどのようなことが起きるのかをイメージできるかどうかだと思います。そうでないと、行動に取りこぼしや無為なことが発生してきますが、それを抑制するのが事前の対策と知識ではないかと思います。事前の対策は、防災備品を備えるとかのものの対策も大事ですが、その前に大事なことは、自分たちの地域にいかなるリスクがあるのか、想定できるのかを情報として共有することです。それによって、発生したときのどのようなことが展開されるのかが理解できて次の手を打てることとなります。つまり、防災では出たとこ勝負では勝ち味がないのです。災害はイメージが勝負ですので、直観力を活かして、先を読むことができることが求められています。過去の災害でも、地域のリーダーが率先して住民に情報を伝達することで、住民が自ら走り出す勇気をもって、早期に判断して的確な行動をした例がたくさんあります。逆に、自分は大丈夫ということで、避難が遅れてしまったことも多々あります。いずれの場合でも、情報の質と伝達方法が関係しますが、そのベースになるのは、地域知です。地域知とは、地域に潜在している過去の履歴、記録、経験、さまざまな科学的知見等を整理しておくことですが、このようなことをさまざまな機会に理解し、地域で共有することです。いわば、地域の資源を顕在化させて、それを住民が知ると同時に住民パワーを引き出すことをしておくことです。それらによって、地域の災害リスクを認識することから課題や問題点を出し合って、リスクを知り、知恵を出す、修復・修正していくこととなります。このような作業は、面倒なようにも見えますが、例えば、ハザードマップを読みこなし、過去の履歴から引き出すことで、地域の特性に合ったID (Important Data) 防災で危険なもの、危険なところを知って、対応、応用、展開をするということを演習するということも有効です。そういうことをすることで、アクティヴ・ラーニング (主体的に課題を解決する。リスクへの対応) になっていくことが期待でき、リスクマネジメントの日常化、「知る、見る、考える」のイメージ化になっていくと思われまます。いずれにしても、目標を明確にし、地域とのかかわりを大事にすることをベースにした自分に合ったやり方、地域の特性を活用したやり方があるはずです。例えば、PDCA (P:何がリスクか D:どう理解して対応を考える (方法、手順) C:優先度の評価 A:修繕、改善への道筋を理解 (共有)) というサイクルで地域に合った対策を構想してみることも、情報共有していく上で有力なツールだと思います。